

第 10 章

1957年と1982年の間のドイツ福音主義教会の
ディアコニー事業とその世界教会奉仕

1

2つの大きな慈善事業の共同 - 内国伝道と救援事業の合併
テーオドーア・ショーバー - シュトゥットガルト・
ディアコニー事業団専門分野 - 伝道の広がり

1945年から1957年は軽率に詳細を語ることはできない。それらは普通ではなかった。あとで「肉体のとげ」となるとどまった多くのものが、この中で成長していった。

それに続く発展の始まりに、1957年、ベーテルの内国伝道中央委員会支部とシュトゥットガルトの救援事業中央事務所の統合がなされた。この措置についての採決はまず中央委員会と救援事業委員会の中で行われた。そのあと、ようやくこの題目の取り扱いがドイツ福音主義教会の教会会議で議論されたが、その時、別の問題が焦点となり、東ドイツの異議申し立てのために、会議はハレからベルリン・シュパンダウに移されることになった。連邦共和国ですべての人に課せられる兵役義務が導入された後、兵士への牧会契約が先行するテーマとなって入れ替わった。1957年3月8日、2つの採決がなされ、反対も棄権もない全会一致により両方の首脳会議の決議がなされた。ドイツ福音主義教会の教会会議は教会法の手続きを経てとりあえず試験的にやってみる取り決めを承認した。

それは、中央委員会にとっては100年を超える歴史からの別れを意味し、救援事業にとってはその時代の年報に書き込まれた12年の歴史からの別れを意味した。これまで自立した重要な2つの事業は、それぞれに固有の生き方をしてきたが、今は一緒に活動しようとしている。

それはほとんど最後の瞬間にいたるまで確実に闘いとった慎重な合言葉であった。[1]

共同事業の専任総裁に、これまで内国伝道中央委員会の事務局長であったフリードリヒ・ミュンヒマイアーがベーターで選ばれた。こんなにふさわしい人物はこれまでにいなかった！彼は、救援事業が世界教会の実現のために根本的に貢献した功績を全面的に認めた。それらは福祉の社会参加においても、教会共同体のディアコニーの活動を活発にするという点でも、おなじように評価されなければならない。「この3つの分野には、敬意をあらわすべきである。」「[2]

D. ミュンヒマイアーは「内国伝道のディアコニー事業団とドイツ福音主義教会救援事業団の長として、6年間責任者を務めた。彼は2つの事業を統合したが、そのあと時間限定的な措置という考えは内容を失ったものとなった。彼は健康上の理由で愛していた職務をやむを得ず辞めなければならなかった。[3]

後任の選挙は、1963年4月3日、ノイエンデッテルスアウのディアコニー事業団長、牧師で神学博士テオドーア・ショーバーが選ばれ、1963年10月1日に就任した。共同事業は、新しい長の下で、初めから3つの次のスローガンを立てた。教会の次元でのディアコニー、新しい課題への準備、ディアコニー事業の強化と特色を出すこと。それは活気を取り戻す、広がりをもったプログラムであった！[4]

1975年6月6日、およそ20年間は慎重になし、これからは「ドイツ福音主義教会ディアコニー事業団」として合同を受け入れた。救援事業は混乱するようになった。すでに1957年に閉鎖されたものが、基礎に残っていたのである。そこで、今は法的に「ゆるやかな団体」として確定するようになったが、公開性・可動性はすべての方向に向かっているだけではなく、これは過去のドイツ民主共和国[東ドイツ]の同胞教会に比べるだけでなく、ほかの福祉団体のような福音主義自由教会の仲間としても、明確にイエス・キリストの教会の全体を構成するものでなければならなかった。

これは、事業の重要な委員会において「ディアコニー評議会」のような「ディアコニー協議会」に反映された。その中でドイツ福音主義

教会の代表者は、評議会のような会議を経て、全自由教会の代表者、各教会のディアコニー事業と専門団体の代表者と、一緒に交渉し、決定する。参加者はこれまで教会外務省、教会事務所とハンブルクの福音主義伝道事業の投票権を持たない代理人であり、またそれぞれにディアコニー事業団の総裁と主な職員たちである。事業団の指導者が従事する「ディアコニー評議会」は「ディアコニー協議会」の18の加盟メンバーから成るふさわしいものとなった。[5]

ディアコニー事業団の本部はシュトゥットガルトにある。その後数年は根本から熟考され、7つの専門分野に活動を分けた時、専門分野の神学を第1の地位に移動したのは偶然ではなかった。「専門分野を国民伝道と福音運動」に合併した。双方の専門分野には、2つの指導職がつけられた。

「世界教会専門分野」は「世界教会ディアコニー中央委員会」を第2の地位に移した。その後、「社会福祉政策」専門分野が続いた。社会福祉国家は立法の企画をもたなければならない、また、思想にとらわれてうさんくさくなることもあるが、間違った方向に導かないように「社会福祉法治国家」をどこまでも追い求めなければならない。それは1957年以前にも、これらの専門領域が必要であり、また必要であり続けたことを示している。ここでほかの専門領域にとっても欠かせない、「福祉」「保健衛生制度」また「救援」という援護がなされた。最後に、先に述べた専門分野は「権利と経済」を、権利と経済委員会および、ディアコニー協議会の財政委員会によって援助し、とりわけ連邦共和国でなされている個々のディアコニー事業を助けるべきである。[6]

オイゲン・ゲルステンマイヤーはすでに次のように言っていた。即ち、ディアコニーの神学的、国民伝道的な面は、緊急の日常活動の下で非常に後退するだろう。そのようになった。ディアコニー協議会の明確な意志によって、これから両者はひとつの専門分野の中でディアコニーと国民伝道にあうように神学的根本問題に関する課題領域を整理するようになった。そのディレクターは神学博士ハンス・クリストフ・フォン・ハーゼ牧師と神学博士ハインリッヒ・ヘルマン・ウルリッヒ牧師であった。彼らは次のことに重大な関心を持っていた。即ち、伝

道という次元は、ディアコニー事業の偉大でかつ困難な課題を負った次の25年のディアコニーと福音宣教に要約されてきた。[7]

国民伝道は、次の10年の間に770人の専任の職員がいて、それに約12万人のボランティアの職員がいた。[8] また、国民伝道は大きな信徒運動を生み出した。電話牧会の実験も成果をあげた。あとに続く20年間に、75人の専任と2,231人のボランティアの職員たちが奉仕した。[9] 1982年1月1日以来文書牧会が、連邦レベルで、ディアコニー事業に加わってきた。彼らは神学博士ヴェルナー・エンチ教授の指導により、「成人向カテキスム」終了後の活動として考えられたバイエルン州教会と福音主義文書救援に支援され、高い評価を得た。[10]

都市伝道における国民伝道とディアコニーの統合は特別な活動分野であった。彼らはそこで日々の実践を行い、年々鍛えられていった。個々の都市伝道も同様にその歴史を重ねてより強くディアコニー的、福祉的、或いは宣教的傾向があったとしても、それらは「福音主義労働組合」の中で、ディアコニー的な宣教的な「都市伝道奉仕の基本計画」と共通のものに練り上げられた。

彼らは特別なことが起こると思った。「都市文明の登場と伝統的宗教の没落は、私たちの時代を特色づける2つの特徴であり、2つは親密に互いを結びつける運動である。・・・人が共に生きる生き方は、彼らの人生の意味を問うて改める仕方に極めて大きな影響を与える。」(ハーヴィコックス) 反人間的な潮流は、教会の塔を目印として特徴づけるのではなく、地域の中に深く広がっていく新しいベッドタウンの中に見られた。

「この世に都市がある限り、都市は、自己実現を求め、安全を求め、社会的また文化的な生活向上を求めるあこがれの的となる。」同時にこの都市は人間の挫折、喪失、没落と絶望のたまり場であった。[11]

都市伝道の中で、ディアコニー事業の二つの線は基本的に一つになる。まず大都市は人口密集地域に複雑で多層なものを生じる。もちろん都市伝道はほかの組織と協力すると同様に、教会と国の部署と協力し、別のタイプの教会相談所と協力をするようになった。加えて、都市伝道はしばしばその中で伝道団が出会った友人仲間と共に、移民し

た人たちの地域の中で、新しい教会共同体を形成する原細胞の役割を、もとはカトリックがつくってきた大都市の中で演じた。

全ドイツはこのことをミュンヘンの中に見てきた。ここで専任の協力者と、忙しい合間をぬって働く仲間たちが800人をこえて増加している全教会の人たちのために、小教区をこえた宣教の諸課題が生じた。だが、大都市の衛星都市ハッセルベルクの中に、「社会福祉共同体」をつくる実験を行ったが、その発展に反対する者も生み出した。彼らは、ここで7千人足らずの福音主義の共同体を育てた。その大部分は東ドイツから来た低所得者住宅に住む人たちであり、そのほとんどは教会との結びつきをもたなかった。ここから多くのことが、共同体をこえた教会の事業によって、慈善分野を「万能選手」のような学部長オットー・シュタイナーのもとで、また専任職員のチームのもとで、ボランティアの職員たちの大きな群れの助けを得て、再び地域共同体に反映されるようになった。すべては、さまざまな役所を調整して、共に神に聴き、奉仕し、賛美をするために地方で生活している人たちの中心に向かった。[12] ディアコニーと伝道が互いに協力して行う大都市の分野には予期せぬ展望と可能性があった！

2

ディアコニー職員 - 統計上の事か？

大企業としてのディアコニー組織 - 神学と教会の衰弱

敬虔主義の影響を強く受けた初期の内国伝道救援事業は、「現世的雰囲気」でなされる以上のものであった。職員問題は、1957年以来ディアコニーの中に受けついできた危機の地点にとどまった。ディアコニー施設とディアコニー奉仕に意欲を持つ内的自信に満ちた職員の数、次第に減少し、それと同時に彼らは、占有できなくなった多くの仕事の分野を内部で調整する影響力もなくした。[13]

職員不足に関するさまざまな理由から活発な訴えがなされるようになった。また、しかし1957年に8万6千人いた専従職員の総数は、年々

2,500人が増加した。1963年には10万8千人を数えた。その時からつづけて増加し、1981年には総数で24万人の職員に達するまでになった。パーセントで表された数字では1977年から21万人が雇用され、1978年までに約2,4%増加、1978年に新たに2,38%、1979年までに、約3,72%に増加し、1980年に3,13%、1981年に4,34%の増加がわかっている。職員の増加は1979年以来、各前年に対して過度に増加してきた。[14]

多くの活動分野が変化しているこの期間に、この事象を一般化しないで、開設し、或いは新設した所に、職員を配置する際、教会的なあるいは信仰的な立場を問うことは暗黙のうちに断念された。職員問題を画一的に扱うことは根本的にできないし、望ましいものではないということはまた別の問題であった。[15] また、すべての生活領域が抱えている福祉は、ここでも、社会福祉国家の渦のなかに巻き込まれていった。ディアコニーは世俗の奉仕分野で発展した。その流れを押しとどめることはできなかった。

1957年という年は、嵐のような再建の時期から、保守と維持の段階に入っていく時だったと言える。なお、世論調査によれば、60年代半ばまでは、福音主義の青年の11%が日曜礼拝についてしっかりした考えをもっていた。それは1982年までに、16歳から29歳までの青年の2%に落ちた。

世論の中に社会的案件が目立ってきた。新しい視点は、ディアコニーはキリスト教案件の後退したところで人になされる奉仕であると、支配者のように主張するようになった。関心は宗教を度外視した人間に移った。人間それ自身が何であるかと言うことが、新しいテーマであった。福音主義州教会が始めたばかりの社会福祉学校、社会福祉高等学校の充実はこの傾向を続けた。共同の計画と福音伝道はまっすぐに成功したのではなく、人はこれをディアコニー事業から排除した。1957年から25年の内には息をのむような発展があった。[16]

成果は待たずにあらわれた。時代の流れの中で、混乱するほど多くの人間に関する研究成果、学説、また方法が、種々の福音主義職業訓練所で生まれた。ある特定の学説をもつ代表者たちがディアコニーの

職場で共同研究をするのは困難であった。協力が可能になる前に、多くの努力と時間が議論に費やされなければならなかった。神学的に熟考することは控えられたので、人間学の理解と神学の理解はしばしばばらばらになった。[17]

経済界が激しく発展していく時代に、社会福祉施設は実務面でも、人事面でもよく整備されるようになった。しかしながら、たとえば、レムシュタールのシュテッティンのように、連邦共和国で千人をこえる身体と精神の障害者を450人の看護師と職業教育を受けた人たちがみる最大の精神病院と福祉施設のように、さまざまな施設共同体が大企業に発展するという予測できないことが起こった。同じように、ノイエンドッテルスアウ・ディアコニー事業団は2億3千100万ドイツマルク(1981)の総決算を出して「大企業」といわれるまでになった。その時、年間売上高の53%が3,517名の従業員の人件費支出に割り当てられた。ヴェッター・ホルマルシュタインのディアコニー事業団の整形外科施設は、教会の施設で障害者支援の最大の施設であるが、約1千人の職員を雇用した。教会法をもつベートルの施設は30人の牧師がいるヴェストファーレンの子教会の施設共同体と別のもではなかった。

私たちはここで少しの例外に限って言わなければならない。この発展を見ると、ディアコニー学校への切実な問題がディコアニー事業団につきまとい、それがながい助走と猶予期間をへた後1971年に、主要な事業所とのより親密な関係の中で認識されたことは、もっともなことであった。ここで何度も急激な変化をしているディアコニー活動の問題提起が、混沌におびえる世界の中で話題になった。他方、この学校は、より大きなディアコニー兄弟団に成長するために、それぞれの州連盟と専門連盟のなかで、すべてのディアコニー職員のために、出会いの可能性と相互の提案を提供してきた。[18]

学生革命の時代に、それらは福音主義学校で学びまた生活する学校世界に影響を及ぼし、また1960年以来、かなりよい、また非常によい作業能率をあげてディアコニーの中で協力したが、しかし、しばしば非常に批判的な議論もなされ、[兵役拒否者に課せられる]代替職務遂行

に影響を及ぼした。[19]

私たちはこれ以上調べることは出来ない。ディアコニー事業団は、彼らの指導的な人の中で、ディアコニー会議とディアコニー協議会に助けられてこの挑戦に打ち勝ち、ディアコニーも同様に、福音宣教以上に行動と証しをもってなす重要な奉仕を固く守ってきた。

ディアコニーは自分のためにあるのではない。神学と教会の衰弱した状態、神学者たちの不確実な兆候は、それらの領域にも影響を及ぼし、社会的案件が優先するようになるならば、神学者たちは外見的にはより正確に知っていて、よりよい生活、より公正な組織、国際的な平和政策というようなものも福音の力から生まれる共同体再建とみなすに違いない。そのことについて、ディアコニーは沈黙することはできなかった。[20] 終末に向かって一時的なものになっていく生活態度、例えば生活水準あるいは社会保障を絶対的価値とみなす生活態度を考えると、ディアコニーは教会と共に「福音の終末的次元」を告げるところで、具体的に人それぞれの死の床で、ここだけでなく、「物が神になる」ということにならないように協力しなければならない。

彼らは、ディアコニーの実習をしている若い神学者を獲得するために、彼らとその衝突の中で、落ちこぼれた人と出会い、苦難と断念を神学的に整理し、その生活体験の広がりを受け入れるように助けて達成するように、それぞれの州教会に、何度も依頼している。[21]

日々の充実した協力への感謝は変わりなく、そこで彼らは学問的に方向づけられた専門家としてのみ、人間らしくし、教育を受け、心理学をなし、社会学をなし、そこを一步も出ない活動をしようとした。ディアコニーは、いつも、真の対話の中で彼らと親しく出会い、おそらく誤った職業選択をして危険に陥るようなことはディアコニーの領域にはどこにもないと言えることを、変わらない課題としてきた。充実した研究は、とりわけ「教会の証と奉仕のためのハンドブック」が「ディアコニーと伝道の責任をもつ共同体」という副題をつけて出されるまで、責任を果たそうとし、この問いをずっと持ち続けた。[22]

幻想ぬきのディアコニー - ディアコニーの自由な領域 - 成長して
いく社会福祉業務 - 世俗領域のなかでの自助の発見 - 重点計画

とどまることなく実践してきたディアコニー事業団の原則は、大衆社会における非人間的なものに立ち向かい、釣り合いの取れた社会福祉法の実現に努力してきた。ここでもう一人ディアコニー事業団の副総裁D. パウル・コルマー博士に加えて、たとえば「社会扶助とディアコニーの規定について」また「福祉国家 - 私たちの社会福祉的 - 世界教会運動の状況の批判的総括」という最終的な調査結果が出版された。

[23]

彼の後をルートヴィヒ・ガイセルがディアコニー事業団の副総裁として受継いだ。彼は青年退役将校であり、1947年にドイツ福音主義教会の救援事業に加わり、組織の達人として頭角をあらわした。「人・時間・資金・機会」は、すべて混じりけのない神の賜物であり、ディアコニーは運営を切り盛りする責任を引き受けた。これはリスク管理を含み、はじめから成果が不確かなところを支援することも含んでいた。後退するのか、成果を上げるのか、感謝するのか批判するのか、どちらかでなければならなかった。」

「私たちは、国がそのためにだけ融資をする、隠蔽された養育費と多額の補助金思考から出て、国は徐々に政府当局の権力を行使して融資をしなければならない。」[24]

1980年3月25日の連邦憲法裁判所の決定は、教会全体に意味があった。彼が公的課題についての要求を明らかにし、改革しようとしていることを法の強制によってやりぬくのであれば、立法者は教会が守るべき一定の限界を定めるべきである。国と教会の関係は、一方が他方

の下にある強制と従属の関係ではなく、相互の尊敬と調整された会合の關係に特徴をもっている。それと同時に、ディアコニーは、憲法が規定する自治にふさわしい義務を定め、自己目的に陥ることがないようにした。[25] また個々の国民は、世俗的な施設であれキリスト教の施設であれ、援助と保護を求める自由選択が認められた。

国には総予算の中で、ディアコニーにバランスのとれた公正な基準で財政的援助を義務づけ、ディアコニーの自由な領域を尊重した。その時から、社会福祉的法治国家は、キリスト教徒と、非キリスト教徒の両者からの税金徴収を義務づけている。[26]

景気後退がその影を落とした時、人はディアコニー事業団の中で次のことを知った。「来年は社会福祉給付の検閲があると考えるべきである。社会保障の復興ラッシュが起こり、それがのび放題に成長するならば、制限されることに異論を唱える者は誰もいない。」[27]

国が補助金を絞り、また教会の緊縮予算にも肩代わりをさせるだけであるならば、新しい優先順位が必要である。すべての問題分野をこれ以上充足することはできなくなった。社会活動における重点と方法の変化が、はっきりした形をとってきた。

自由に広がる社会福祉業務は、多くの困窮分野でなされた。そのすべてを示す必要はない。その中でヨハネ騎士団の名があげられる。ヨハネ騎士団は専門家連盟としてディアコニー事業団に加入している。それはヨハネ事故救援、ヨハネ・シュヴェスター、ヨハネ救援組合と共に、この福音主義教団の20のヨーロッパ協同組合に合併した。ヨハネ騎士団は、第2次世界大戦中に、東ドイツにおいて病院と財産に非常な損害を受けたあと、西ドイツではそれをのりこえて再び大きな意味を獲得した。[28]

福音主義の牧師アーノルド・ダンネンマン教授は、1946年、連邦共和国におけるキリスト教教育と職業養成機関の最大の民間事業団であったドイツキリスト教青年事業団に招かれた。内国伝道と救援事業とキリスト教青年同盟の人たちは共同の創始者であった。ダンネンマンは総裁として事業団を指導した。その間に、年間およそ8万人の少年たちが暮らしている112のキリスト教少年の村は、別の組織であった。

このことは次のように言われた。「誰ひとり見捨てられてはならない。イエス・キリストにおいて私たちに証された神の愛を完全に行うように私たちに求められている。」この活動はおよそ3,500人に対して常勤の職員と共に実行された。「キリストを信じる信仰から行なわれる教育」は基本的な方向を示した。また、十分に力を尽くしていない宗教教師の解任が自由になされた。[29] 大学入学資格試験や同じ時に専門試験を目指す社会福祉教育研究所、青年の村クリストフォロス学校は、「聖書と信仰」セミナーによって補充され連携している。ここから2つの少年の村が発展し、マダガスカルのアンチラベ少年の村、ギニアのカンカン少年の村が生まれた。[30]

世界教会の路線は、近代に生まれたディアコニー生活共同体にある福音主義兄弟姉妹会の中にそのまま残っている。それは、共同生活の兄弟姉妹会において、家族を離れ、最後の召命をうけていない兄弟姉妹会において、また新しいディアコニーの形において、異なっている。テゼ共同体、グランシャン共同体、世界教会マリア姉妹会、ゼルピッツ・キリスト兄弟会、そしてグナーデントールイエス兄弟会は最も知られている。彼らは全世界にディアコニーと証しを行う責任を覚えている。[31]

社会福祉の研究者たちは、すでに数年来起っている変化を次のように記している。即ち、異常に長く続いている経済成長と引き換えに支払われている疎外の代価はたいしたことはないと思われてきた。自ら作りだした孤立、社会的匿名性のなかでの生活は、以前より自由の増大として経験された。しかしながらこの自由は多くの人にとってむなしい正体をあらわした。社会との接触の中の安全追求は人の基本的な欲求であった。そのような生来の関心のすべてを抑圧できるわけではない。いまや私たちはそれに応える段階に来ている。人はむなしい気持ちで孤立を克服しようとし、その中で新しい出会いを求めて心を開き、直接に人と接するぬくもりを求めている。近所の人々との出会いが準備されるようになった。相互に助け合う準備がなされた。連帯と隣人愛が大きく書かれるようになった。それらはもはやスローガンではない。人はみな同胞という言葉はほとんど口にされないようになっ

た。

この内的変化はどれもうまくいっていない。内的むなしさに、ほかの反応もあった。薬物やアルコールに逃れようとする人がいた。1981年には、190万人の中毒患者が連邦共和国にいた。[32]

1975年のデータによるとディアコニーは、4万人の中毒患者が、2千人以上のヘルパーが無給で働く360の自助グループによって援助をした。3万2千人が相談所を巡回し、1万人が専門クリニックと中継施設に行った。「患者と信徒が専門家と対等に並ぶ、余暇と保養という形の中で、自助グループと共同体グループの中にいたるまで、一連の治療を行う専門家の援助と個人の寄付の組み合わせは、これをディアコニーがうまくやっていくように要求した。」「[33]

この関連で、世界的運動は、35年前アメリカで希望を失って酒飲みとなった一人は医者で一人は株式取引者の2人の男から始まったアルコール中毒患者自助組織を不安げに組み込んだ。だが彼らは、中毒について正直に語りはじめ、まずお互いに、そして次は他のアルコール中毒者と話し始めた。

そこで「アルコール中毒患者自助組織」が起った。そうこうする間に、世界の多くの国々の中に運動があった。数え切れないほどの人たちがこの広がりを感じた。彼らは「酒をのまなく」なった。多くのグループが連邦共和国につくられた。いろいろなグループが刑務所で効果的な活動をした。連絡係の名誉職は、例外なく「酒を飲まなくなったアルコール中毒患者」である。この自助グループの人たちは、同じ運命を共にする経験をし、ここに来てすべての悲惨をほかの人に心から打ち明けることができる人を援助する。それは自助グループの活動であり、過小評価することは出来ない。もし、逆戻りしたならば、ほかの人が彼らを勇気づけることになる。多くの人ができるようにしてついに中毒の衝動から逃れるのである。[34]

悲観的なほどに多いアルコール中毒患者に、伝道、福音、牧会を強調する方向に向かって90年来「青十字」の国際運動が起こっている。彼らは、18の中央連盟の中に、その18万1千人の会員を、連邦共和国に7千人の会員、もしくは同伴者としての名誉職の援助者、および135

人の専任者を、その一部は協会の形で出会いのグループをつくってきた。彼らはアルコール中毒患者の複合的なすべての問題を「アルコール中毒 - 助けは手元にある」という基本テーマのもと、はばひろい広報活動をおこなっている。[35]

この関連で、もう一つのキリスト教自助グループをあげなければならない。1890年に誰が組織したというものでない「白十字」はキリスト教結婚と性の問題に対して、キリスト教はどう考えるのかを明らかにし、とりわけ議論が混乱した中で、また急激に変化する流行の中で、成長していく者に役立とうとした。

ディアコニー協議会は、意識変革のために、ディアコニー会議と一緒にD. ヘルムート・クラス監督の指導の下、ふさわしい時に重点計画を発展し、1975年「障害者支援」、1976年と1978年、1979年に「老人支援」その他、多くの計画を立案した。そうこうしているうちに、多くの都市の老人施設で老人相談が始まった。

障害者は、今は、おそれずに社会に出ている。彼らが障害者の数を数えるのは、リスクを負おうとするようなものだという時、内国伝道は彼らとほぼ同じ考え方である。彼らは外からの援助を求め、少しばかりのセラピーをもっと人間的に日常的にしてくれるように願っている。彼らは、専門的奉仕に依存することについて、全体的なまた禁治産者とされた者への支援を、親しい人たちの中での共同体の援助は、彼ら[障害者]にとっては、非営利組織が提供するよりもっと多くのことを意味した。彼らはどんな場合も感謝を忘れないし、また全ての人が教会と内国伝道にくらべて挑戦的であったわけではない。「ディアコニー - 74 - ディアコニー事業団年報 - 内国伝道と救援事業 - 福祉国家におけるディアコニー」の中に掲載されるようになったイエス・ノーで答える問答で提出されている若者の声は、社会福祉政策は経済成長依存から離れるべきであり、すべては融資援助と人道的援助であるのがよい、というものである。というのは、それは外国の力に依存し、利己主義を促進し、救援の備えを弱めるからである。

アレンスバツハ世論調査研究所の長期の分析によると若者はより多く社会の保護を求めている。それは個人の余裕を次第にせばめてきて

いる。その際、その影響は自己責任で生活を守る形態に及んでいる。女性の活動が成長し、すべては「幻想ぬきのディアコニー」と一致しているように思われる。私たちは将来に不毛の年が来ることを恐れてはいない。互いに親しさを増していけば過剰に支配することもない。アメリカの福祉システムはそこだけでなく、それを受け入れてきた殆どすべての西側近代国家のその裏側に見られた。ディアコニー事業団の内部では、数年来熟考が尽くされてきた。頭の冴えた青年たちが私たちの予想して望んだこととは別のことを継続している。

4

世界教会ディアコニーの兆しの中で - ドイツのための世界教会
援助の完結 - 「世界の人々にパンを」行動 - 災害救援
教会の奉仕の展開 - 海外奉仕 - 世界教会の協力

援助教会の考えでなく、内国伝道と救援事業を行う世界教会の援助計画の考えに歩調をあわせた世界の同胞援助は、驚くべき兆しをなした。1959年と1960年は、なお819万7,666kgの救援物資がドイツに送られていた。1959年は転機となった。

西ドイツの経済状況が変わり、外国からの更なる救援物資を断って、世界のほかの困窮した国のために送るようになった。このことは、厳粛な儀式の中で告げられた。それと同時にアメリカの80億ドイツマルクをこえる余剰農産物を、とりわけ連邦共和国の子沢山の家族に分け与える、いわゆる「余剰計画」も終わった。333万1kgの原綿の援助はドイツで洗面具や寝具に加工する100万kgの布地にされ、内国伝道の施設にかろうじて足りる分が配布された。アメリカから送られた40頭の牝牛が、最後の輸送で、追放された難民のための「ハイファー計画」の中で送られた。10年間で、4,313頭の良質の牝牛が委譲された。
[36]

これらの救援物資の分配をした救援事業の訓練されたスタッフは、ディアコニー事業団の中央事務所で新しい世界教会の救援事業のため

に働くようになった。

1959年のクリスマスには、ドイツの全ての州教会と福音主義自由教会で「世界の人々にパンを」ささげる呼びかけがなされた。ドイツ福音主義教会の中で集められた中で一番高成績であったのは献金で集められた総額2千万ドイツマルクであった。ドイツ民主共和国(東ドイツ)の教会では別個に480万ドイツマルクが集められた。ドイツ連邦共和国[西ドイツ]は翌年1981年、献金総額が7千2百万ドイツマルクに達した。1981年の世論調査は、一時的な景気後退があったにもかかわらず、対発展途上国援助において積極的な評価がなされた。彼らはこの領域で集められる献金のすべてに責任を持った。賛成67%、反対20%、回答なし14%という-「世界の人々にパンを」が加えられた。[37]

共同の分配委員会が作られた。教会の世界教会協議会と、ルター教会世界連盟はたくさんの調査された救援の提言を仲介した。ディアコニー事業団は、シュトゥットガルトにある中央事務局と一緒に、出来る限りの全ての分配と「世界の人々にパンを」の実行を引き受けた。Dr. ショーバー博士、教授である総裁の下で、目指す目標としてかかげた1982年までに24万人以上にふくれあがったディアコニー複合体のあふれるばかりの有能な職員たちを、ある分野と問題領域に送り出すことを課題とし、エリート養成を行なった。[38] ここでディアコニー事業団に示された世界教会の任務に、彼らは直接に役立っている。

2人の人物が重要な地位につき、彼らは次のように「世界の人々にパンを」行動の父と言われた。即ち、情熱的な兄弟愛の説教者、教会総代D. クリスチャン・ベルクと後のディアコニー事業団副総裁ルートヴィヒ・ガイセル、この2人が救援活動に最初から参加した協力者であった。[39] 彼らは初めからここに召された人たちであった。

ここで影響を及ぼしたものは、1948年アムステルダムでの世界教会協議会以来堅く結ばれた教会を通して、世界規模の兄弟愛を経験した最初の感謝の返事であった。「世界の人々にパンを」は多くのドイツ人を飢えから守っただけでなく、それは自助であった。また失われてしまった生きる意欲を取り戻した。今や「世界の人々にパンを」は、戦後のドイツよりも思わしくない「第3世界」の人々に役立つべきであっ

た。

それははじめから国の補助金なしで「世界の人々にパンを」行動に転換してもよいと考えられていた。それは東西の福音主義キリスト教界が統一して行う行動をおびやかした。それは教会共同体からの本当のささげものにとどまっていなければならなかった。[40] 「『世界の人々にパンを』行動は、通常の援助キャンペーンとははっきり区別された背景と深い次元を持っていた。私たちが支払うことで片付くのではない。私たちの援助は、私たちが多くの経済的社会的政治的イメージを変えてしまうほどのことを実証しなければならない。」[41]

ディアコニー事業団に委託された災害救援の始まりは、1960年以前にさかのぼる。国際的な、また国の救援組織の内部ではディアコニーの任務に従って - 「世界の人々にパンを」の際、教会と政府と国際的組織との関係者と話し合ったように、 - そのつど協力する義務があった。[42] 1962年以来、組織的な災害援助の任務にしたがって約300の災害援助が、アジア、アフリカ、南アメリカ、そしてヨーロッパで、1978年までの期間に、人種、宗教の区別なく援助されるようになった。[43] ディアコニー事業団は1962年から1974年の間に、1億3千400万に上る金額を送ってきた。[44] 救援活動で活発に活動する人は、ルートヴィヒ・ガイセルの災害援助にかかわった従事者のように、初めからルター教会世界奉仕団にいた人たちである。[45] 戦後の「世界教会難民計画」は援助国の下で結局は反対の連続を経験した。今や、ドイツは先頭に立っている。それからスイスとそして最後にアメリカが続いている。「教会を援助する教会」行動は教会の困窮救援プログラムに属している。

次に「発展途上国援助福音主義本部」の創立が続いた。連邦政府はコンラート・アデナウアーの下で、1962年、ドイツ福音主義教会に発展途上国対策資金を自由に使わせるようにした。そこで「世界の人々にパンを」行動は、国の資金の受け取りを拒絶しながら、本部はこれらの資金の管理をしなければならなかった。1968年のうちには「教会の発展途上国援助奉仕団」を設立しようというドイツ福音主義教会のシュパンダウ教会会議のアピールがなされた。今や、これまで世界教

会難民救援のような、ルター教会世界奉仕のもう一つの救援計画に割り当てられていた国の援助金が、この新しい設立に投入された。州教会は、さしあたり教会財政の2%を世界の貧困と飢えと困窮の克服とその原因克服」のために教会の発展途上国救援奉仕を通して用いることを決定した。こうした行動をする際にも、かつて1945年と1957年の間にドイツ福音主義教会救援事業がしたように、初めから世界教会共同体の枠の中で協力して扱うことが望まれた。このことは「世界の人々にパンを」行動やドイツ福音主義教会が支える他の救援組織にとっても同じくらい重要であった。[46]

世界教会ディアコニーの強さは初めから計画推進者の80%以上が海外の教会や世界教会のグループの中にとどまっていたことであり、今もそうである。1981年、ポーランド救援が始まった時にも同じ事が言える。人はいつでも困窮の現場に踏み込むことができた。全資金の4分の3は、福音主義本部で開発途上国援助のために、後年は、ずっと教会自身が集めるようになり、その後4回は、国の補助を受けて維持された。もちろん世界教会ディアコニーの任務を説明し、多くの修正がなされなければならず、1973年のブレーメンにおけるドイツ福音主義教会総会ではそのようになされた。けれども私達はここでその究明を続けるべきではない。[47]

そうこうするうちに福音主義教会作業チームは - 「世界の人々にパンを」行動との限られた時間の中で、また内容的な関わりにおいて - 1960年、海外の専門家の紹介で人的な開発途上国援助を目的としてつくられた。「海外奉仕」は「世界の人々にパンを」のようにではなく、ディアコニー事業団の管理の中におかれた。中央事務所と統括組織をもつディアコニー事業団のような、今は専門家連盟としてディアコニー事業団に属している登録団体がつくられた。プログラムが適切に実行されているか仲介者が監督しているのではないかという疑いは回避されなければならなかった。

今日まで、海外の仲間たちの明確な要望にそってのみ、依頼された専門家グループが派遣されてきた。それらの任務の決定は、明らかに国外にいる仲間のもとでなされた。一生任用される人はいなかった。

この共同作業が始まって以来、1千人をこえる、その大部分が結婚した専門家グループが広く海外へ行った。

人は常に学び続けなければならない。故郷で食事をした戦後の経験から、「世界の人々にパンを」や他の全ての奉仕が始まった時代の発展途上国援助政策の楽観主義は、修正されるようになった。海外での再建活動はドイツにおける再建よりも困難な展開をした。資金と専門家は十分でなかった。けれども兆しは生まれていた。第3世界の国々は、ここで何が起きているか、何が行なわれようとしているかを知った。そこで人はいつも、どのように、どこに出動がなされるべきか、新しく学ぶ用意をしているという肯定的な結果が重要なことであった。[48] ディアコニー事業団の総裁テオドーア・ショーバーはここで本質的なことを言った。

災害救援は、幼稚園における日常と同じように、複雑なイスラム教理解に直接役立った。西洋のキリスト教徒の限界は、世界の東方正教会とくらべるとより明らかになった。ここで世界教会のディアコニーは何度も道を拓いて先頭を進んでいる。「愛の対話は教えの対話に何度も先行した。」[49]

とりわけ戦後のディアコニーとカリタスの協力は、喜ばしい展開をした。毎月、両方の教会とそのディアコニー事業団は、すべての教会がその都度献金をして、共通の発展途上国援助計画を提供すること、また、大新聞に繰り返し「世界の人々にパンを」「困窮者のために」を一緒に広告し、その際広告を無料で印刷してくれるようになったことは、全く目立たないようになされた。

「ドイツ福音主義教会ディアコニー労働共同体」の中で、福音主義州教会と福音主義自由教会の連帯がなかったということとはできない。第3世界の教会と、また社会主義国家の中で、活発で直接的な多くの交流が生まれた。「内国伝道とディアコニー国際連盟」の西ヨーロッパと東ヨーロッパにおけるこれらの事業のすべては合併された。定期的な専門家会議が西ヨーロッパと社会主義国家の中で交互に開かれるようになった。[50]

私たちはここでちょっと止まろう。私達は「行動するディアコニー」を目指して努力している。[51] 第2次世界大戦後の数年、成果としてはまったく不確実な時代の中にいたことがある。世界のあらゆるところにあるキリスト教会の間をつなぐものが、ディアコニーの中にあり、それは混沌に脅かされる人間性の中で、しっかり立証されてきた。